

5

80

70

60

6

7

8

9

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5



義理に家屋の事よりいふ事

月は無限の事なり

水限あるべ事無限の事なり

入る事月よりあれ心なり

物之れ感晴明の月計

ふ物ハシメカニ

朗詠云對雨亭月序源順○楊貴妃

原常思未人未達也

此儀ル恨ト玄菟子今集藤急聞香

これこそ之入ゆく事もすむては

極もうじうじうりたわらな

直立とあらねり

用入者

障碍字

かくも物

ひさと車

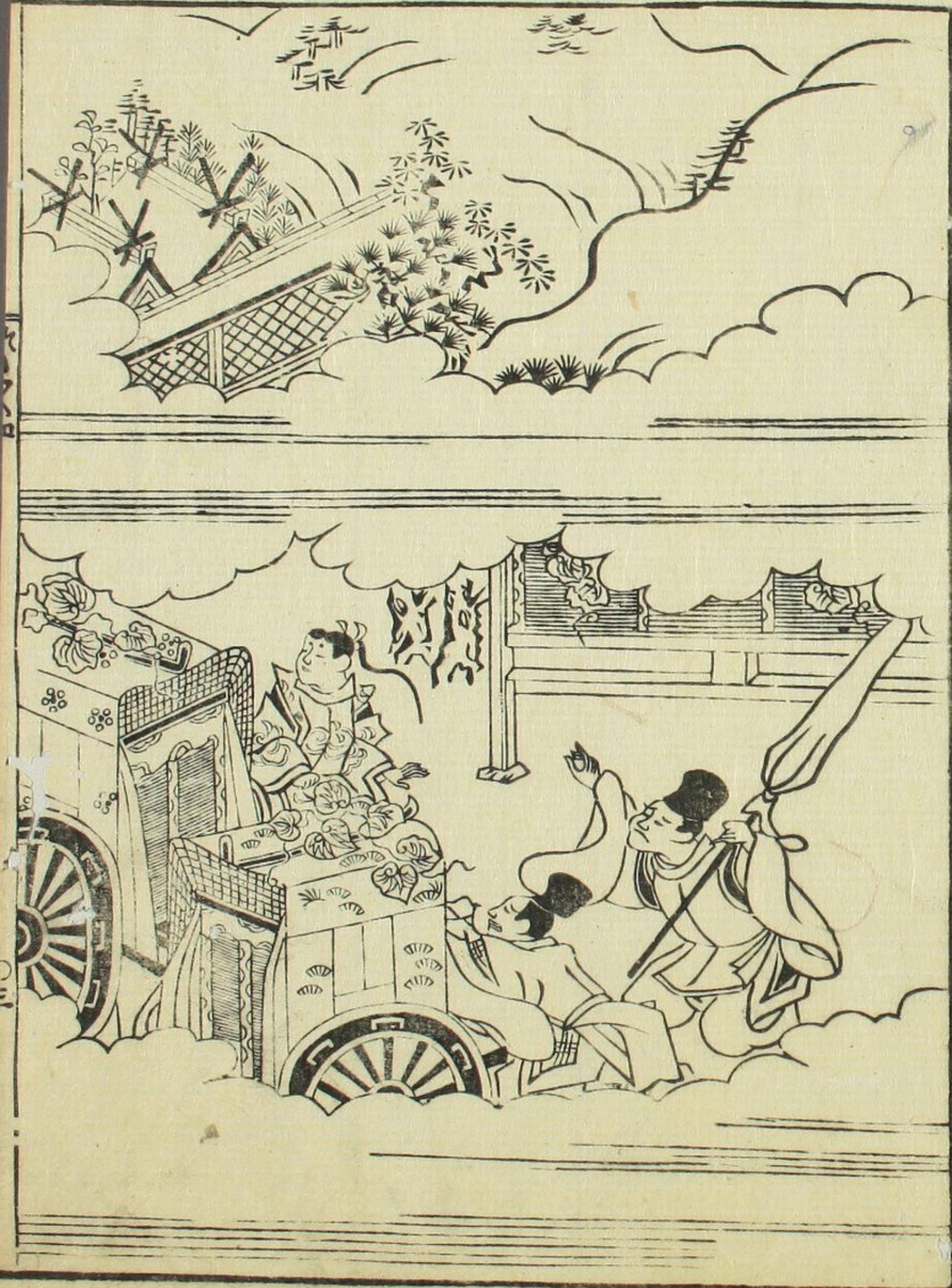
じも半

ひさと車

草卷之四



きよひもすり、いまはアヌアリとひ  
きな、道筋たまへとあらむをき  
まねあじて、アヌアヌアレリ、首尾  
わもやく、  
遠度とおどり、だゆく  
通とせキ、とゆりと思ふたと  
アヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌ  
さくすうを、  
芭茅が省芭茅の秋<sup>アサガ</sup>  
ひうめあすと葉平の  
とへしといふ。月のノトムカシとす。  
月やあみあやじいのまあんが  
ひめハリヘアヒテ 三月 から蒲<sup>カモ</sup>  
十五夜ヲニ五夜中新月色千里か故人心  
芭茅<sup>アサガ</sup> 千日已辰の月夜更<sup>ル</sup>程月青<sup>シロ</sup>物  
芭茅をくるひも山中、氣あひ  
ゆきやうあひやうも<sup>アヒヤウモ</sup>  
きへ種まく、りく春<sup>アキ</sup>アヒ。芭茅<sup>アサガ</sup>  
月れりつて映る<sup>アヒタマツリ</sup>  
まのうへよもぎり、こころをめぐらす。わく人<sup>アヒ</sup>人<sup>アヒ</sup>も、  
都ども<sup>アヒ</sup>うそと申す。とて月ひとともこの月<sup>アヒ</sup>とて、



牛 飼 下 部  
ウシ カイ ハセ

部

卷之三

あしり

月夜の面白

卷之三

卷之三

スダリ道具  
スダリ道具

卷之三

せひまゝ世感甚人の事常無常ノゆゑ  
ど思ひ合ふと人語えふと此大語の  
有ねども「そ案てあら意あれと  
か生は」の詞也うう巨き等も案え許  
多くてこぐくふと云詞也ううと云  
が牛食下部をどつてと云者と云  
省みてうりぬをの人れ  
ひどりうりうりもにとくせうへ人悉く年  
へな我身がれぬへたにまうくとくとく  
侍つきくまづまづ露もとの年やあ年の  
まれまづまづめん新奉うり

らきわ  
まくら  
うしゆ  
しこつ  
丸めき  
こひんが

人あはれ  
人あはれ  
人あはれ  
人あはれ  
人あはれ  
人あはれ

大ニシキ危器玉ノ少々漏刻ノ時皆漏リ  
行ふハトメは遠去王府傳山林不能給  
千萬有弊遂所舟墨ノ事モアレ  
故テじのへよ名トアツ西行  
ノ中より風き人死ふ  
もか田舟をうるむ  
日ハ朝。それぞ棺とし  
館といふ淮南子鬻棺者欲民之疾病  
鬻賣也和名云棺音官一貫和名比止  
立音通死人と入る箱  
ケラモ有<sup>レ</sup>ニ不思  
モ<sup>レ</sup>  
モ<sup>レ</sup>暫時<sup>ト</sup>百刻<sup>トス</sup>其一刻<sup>ヲ</sup>三十六  
ワリタル<sup>ト</sup>暫時<sup>ト</sup>エトソ<sup>セ</sup>ト<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>百  
首<sup>タヘ</sup>モ<sup>レ</sup>モ<sup>レ</sup>ト<sup>レ</sup>ナ<sup>ム</sup>モ<sup>レ</sup>ナ<sup>ム</sup>ト<sup>レ</sup>  
モ<sup>レ</sup>ナ<sup>ム</sup>力<sup>アガ</sup>ア<sup>ガ</sup>レ<sup>カ</sup>リ<sup>タ</sup>  
まく子立 二 一 三 五 二 二 四 一 一

ゆうべ飲んで  
今日に一人  
はる日をあ  
くまくとて  
もととく  
ひよこす  
てまく  
とて  
くわく  
とく  
くわく  
くわく

あまくわらひ  
すもとてうる  
くぬべ。都  
人公をかひ  
まよとくと  
門前。ウチ  
のまことと  
じと。四百  
ひましひん  
が、せひん  
六万石を仕  
む。まことに  
もなかくわ



枯るやうなひのこゑされわゑ  
えどやうのえう 鶴長明作西歌頃

原作物語小説

云鷗翁宜長健。少子繼孫。慈保元年十月  
十七日。中宮叙爵。前奏上支長眠出塚。

八名蓮龍山云物住

卷之三

卷之三

とよりは、此の事に、  
くわびてもうそれへ懐して、  
もの柱の方によつて、九月九日

五と六と七の事は  
やうやくかひあわせた(前)

物を御藥寮より包と奉  
上東門院の一族の妹三條院、后之万吉延一九

わが身のまことをうき  
千載集井泉

ふに六首がよどゆる人物と云ひ

かよあねとて背もたわる  
きりをやまとはまくわら背

あく小女と后えの  
アキコトヒメノ  
并乳母作者部類云前

母、亦後悔、  
心、有、之、此段、家、草木、と、植、ふ、う、  
アーティスト、ジグマ、前、王、が、成、り、事、

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

ねへうわルトアリ立葉ノホ  
重柳 詞花集一條院へゆきあはせ

とくのこまうとくとくまう  
きへきむじゆりてきよくとくせき

又南遷於樹檣樹者因跡也件檣樹地者  
之也桓武天皇遷都之日所被植也而乃

卷之三

思ひよりれ。鴨山内が「季子物語」を  
みぞれほへりしもとと  
自然と捨てよけく有物とむつ  
ぞうさく。とくまくとくあくあふくわ  
是より育てゆかむるが月と置たりと生て葵と花を  
めいへづか。帳すくまくとくとくとく。九月  
九日菊よそりうそくあくといへばさくぬる  
そそへせりよどぐわくよふくとく。枇杷  
白いち石とくわくくれきしてほなにや帳の  
やわん續金縛とくとく  
ふ群良縫之トアリ  
月元署てほきまくとくとく諸抄、昭宣公女穂子と  
内よ。らくぶノヒムホドハモテ  
行りきとて。ちつとあらね林と

とぞうとつまと弁の矢羽とのりか  
をそよがやうの草、からりあう  
といひゆゑとくとく

百三十九  
家よわざれ木ねこ。ねの立  
葉もトトロひきいづくらう。  
ハラス

まちを貢へ都の有をとび  
ぞよむかくたうひるくらむに

左近松江談云内裏紫宸  
殿前庭櫻樹有本

物なり。いとそぞらに  
天皇御臨也。

百三九

卷一

七

八

者。昔要  
及義和

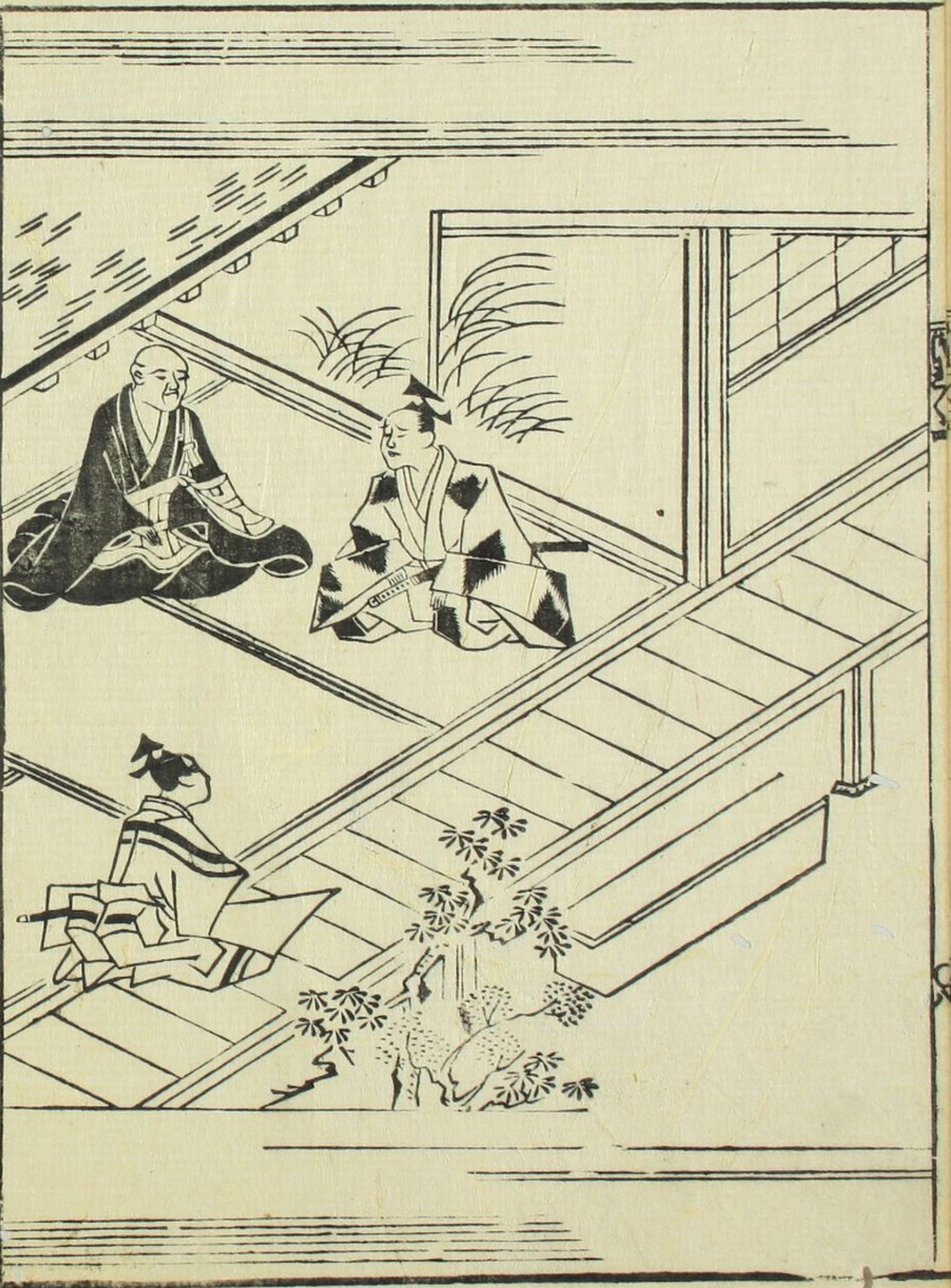
物  
九

とてしも有りん。とてご  
とてあくを。のとてつこがる。  
虫づくろは連ねへば湯との氣に感て  
ぬ毛虫をさうりし。しきくもえ  
つくりちに毒の又主病をうまくせむ。  
わへりひく。れも  
ひく。ゆめどき。氣色とも  
まくしてとく。けりとくれてね  
ぐまく。れてぬく。ハ。  
**京極入道**正三位權中納言定家(ひさ)貞觀元  
年十一月生家ノ法名明辭(ミヤウ)京極ノ北冷  
泉南ハ二條家有リ故京極入道中納言院  
凡難集十五玄家(アマヤマ)とすりありあよ志  
てとく。今くりへばやうぢかのうづくみて  
やうくわへよみのひよみのひよみのひよみのひ  
ワニトシホシハヒトシホシモテモテモテモテ  
ヨウトシホシモテモテモテモテモテモテモテ

桔梗 残遺集物ノ名ニテ  
まきとらふをくひりへとわ  
くくりづくの 菊襟 前川家  
ともりと今鳥 あむかひとよりと  
をもとめの蘭院 ひの百首歌合  
じくあらぬしよくわくわ  
てりとんかどもく、ひのあまくわ  
物とくや 木香 金花 ひとと通  
古今物の名すりせり あま里の花と  
らとよしどうじゆいよく  
記木香上書多識 木香 つとあくトヨニセリ  
今玉花ふにつけ葉。カルカヤニシテホ  
アハ 龍膽 亂 あまきとよしど  
波黄菊とくちくハ入字入まぢゆイ  
八菊のうらうてハ茨菊也と云  
前玉スヨリき物が我よ草木もとこと  
じくらぐまつゆる草木もとこと  
よもりあく やアミトシ  
よと物ト道具ハ孰どりと  
くわ  
くわ  
秋山やえり 財とあく

卷之三  
體之前漢書章賢及子玄成俱以明經至相該皆遺之黃金滿巵不如教子

体ノ前漢書、章賢及子玄成俱以明  
經至相詣、遺之黃金滿巣、不如教子  
一經、山谷詩遺金滿巣、常作災、  
口口我してえりや  
まあ、じはそんゆく  
ふべふるアあくて、れ  
ざわ、ま、  
此段ナニコ  
悲田院、延喜式、左右京職式、云九京中路邊  
病者孤子、仰九ケ條、今其所見所遇隨  
便、必令拾送施藥院、又東西悲田院  
於故云在鴨川西畔、施藥院別所、悲田院  
今ハ其名計白河橋ノ邊、残リト寺八泉涌  
寺、ハトトト、上人、要覽云内有智  
德外有勝行、在人之上、名上人。增一經、支  
人處、有過能自改者、名聖人。





アリの次才をもつて一説ハ權

وَلِمَنْجَانَةِ مُهَاجِرَةٍ

名をもとめらるゝ事無く自達の權量あり  
ふれども此段ハセノ愚癡チキなり物人ノ情  
是相シサとばくうじゆゑモニあましにいふ  
病クモリのゆくはさゞわとハ魯人ヤヌにて化  
けシテ死マミとせられり

書釋高辨姓平氏紀元在田都人父軒  
國掌為嘉應帝衛苗日九歲後高  
尾山上覓讀俱會頌十九後真然而稟兩部  
審法自不北山梅尾盛唱賢首宗覓喜  
四年正月十九日唱弥勒號而寂年六十  
省銳用教以生之而作功德之府生友

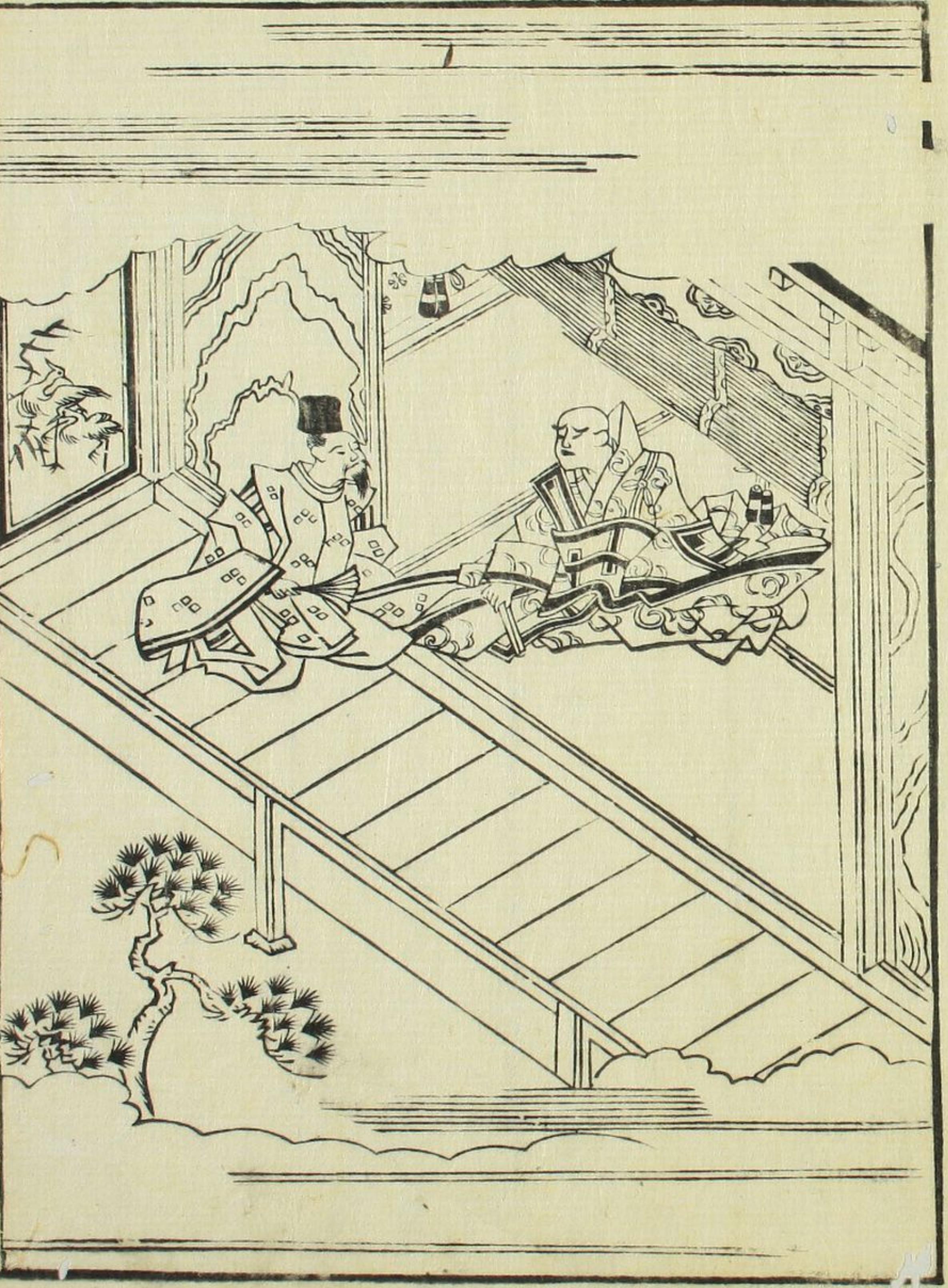
時終よ佛菩薩の事わざりよ運あぐくと思ひ、こゑく  
徳も思ひとひ有全まと思ひて、もやん、放ゆと六病爲  
化ト吉人高しもあらうと六全所へりきて、勝行のア  
初尾ノ人ふとどり、行よ  
馬足をあらどりキモ  
て馬りとくわ  
とばよ人とみてて、あくによ  
宥拵同家ノ人れ。うふと嘸ふ  
ゲヤ。いもぐ人の馬也。わゆりよ  
まよそもする所ま  
人の色  
きりぞまきまん。阿字不生よとくち  
ふきよ。よ結縁とむとづれを  
感吸とくごくみゆく。

夫家とて子の事  
夫の結縁えんじゆん

うそひるわくといひ府生多とつと上人乃手や不牛のい  
男の言根をさへく況いもと謹三体徳あらざる

此段丈人不斷卷法之說一少一多一處  
少者喻君子者喻義小人者喻利多者  
御隱勇夫示重犯是本句通考○聖德之  
甲斐の黒駒今家を捨ててとどまつゝ  
秦河勝一人の馬の口一つもて廻り廻

重乳信頼傳記並不詳



腰眼三足陽明胃經也或云八歲十八  
未廿二年少四歲辛十三年立家

百四

○此段あ笑とりまく  
もん心と達う

十六  
カグ  
矣ノキニ論じて廣へ仁

七十六年八月上林之  
麻草アシナ 康之子也角之本草云孟詵

麻

草と畢よわへ喰ふとば

曰主益氣不可岐鳴嘯其葷中有小蟲視之不見入人鼻必為虫類。葉不及也○瑣碎錄云康葷麝香肉蘗荳切不可就鼻聞蓋有微虫。

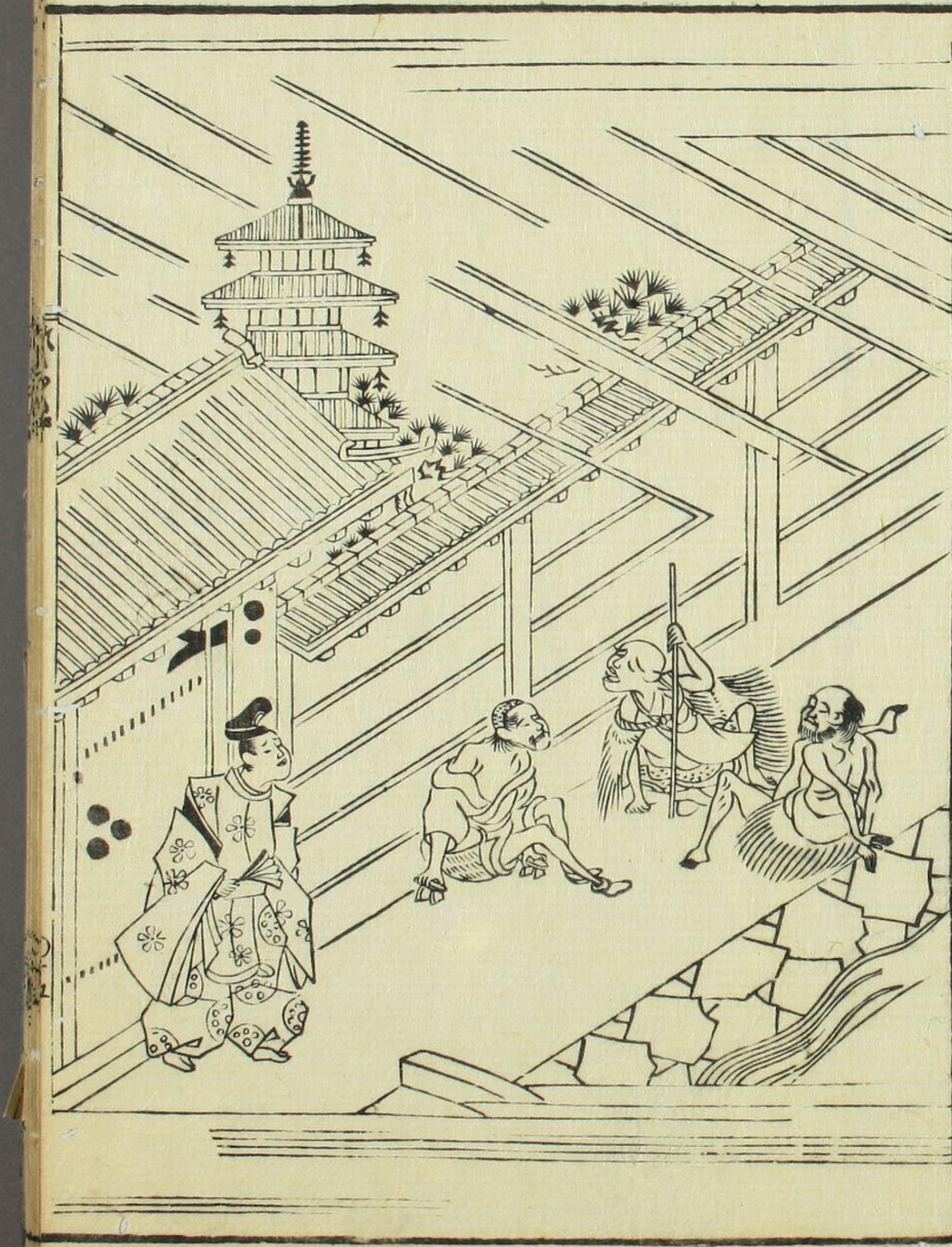
百九

此段も醫を入キと云ひて云々<sup>アシタカ</sup>  
恐るべくと云々<sup>アシタカ</sup>

いはくよふとし  
とひもとくふか  
まふよふとし  
まふよふとし  
**堅<sup>タケ</sup>固<sup>タケ</sup>**  
一向初<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>せりとえを何モシテ  
く事<sup>ハ</sup>お化<sup>ハ</sup>シテモ<sup>タ</sup>  
おながど<sup>タナ</sup>行<sup>ハ</sup>き<sup>タ</sup>ま<sup>ハ</sup>そ<sup>タ</sup>真<sup>タカ</sup>机<sup>タカ</sup>不<sup>タ</sup>調<sup>タ</sup>和<sup>タ</sup>  
やひハ幼<sup>ハ</sup>び<sup>タ</sup>も<sup>タ</sup>  
**口<sup>ヒ</sup>とあくと**  
**複面強頗<sup>コトナク</sup>**  
又<sup>ハ</sup>難<sup>ハ</sup>面<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>塾<sup>ハ</sup>と  
も<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>好<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>  
人の<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>め<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>と

と か ま い う な う 世 俗 門

世俗の如きへとばかりして。生涯とくこと、下をうる人ぢよ。  
ゆくにまじりし年はまじえうへし。されどもりかがねづ  
まくらをとどりあひて、まくらをあらしき事もあらず。まくら  
あらげてやしへ。まくらをまくらしてやまん。いきぬれ珠勝トモハナから、  
天平神護アマテラス元年、稱德帝タケミヒコ高麗天皇  
名銚タケミヒコ四天王釣像タケミヒコ長七八尺タケミヒコ五丈  
大寺タケミヒコノアラ代續日記委タケミヒコ天書大智國タケミヒコ七  
誰タケミヒコとくど西園タケミヒコ門太タケミヒコに  
左府公衡タケミヒコ公勇タケミヒコ又是帝タケミヒコ秋院タケミヒコ  
資朝タケミヒコ權中納言タケミヒコ行三佐檢タケミヒコ非遠使タケミヒコ別當タケミヒコ御天皇タケミヒコの  
のへ日タケミヒコ俊光タケミヒコ三男タケミヒコ年八十九タケミヒコ正月  
より道タケミヒコ也。もと一千年タケミヒコ勝タケミヒコま  
ア眉白きタケミヒコ信保タケミヒコ八八年タケミヒコと  
ふと貴タケミヒコいよすのをタケミヒコからタケミヒコ寵タケミヒコ子  
俊タケミヒコあうタケミヒコ。やとらタケミヒコ不美稱タケミヒコ  
いふとタケミヒコて。一氣タケミヒコもたタケミヒコアム。



あくまでも人間の氣色だらけで、  
てきるところを、林道と呼んでいた

病と生せし 病産死の三バハカの林をと  
くくうりふ年とつたりもけ一段入らと  
生住異滅サツセキヤクス 義和法教イホフコウ 三四相サンザイ 麻痺マブイ り生  
老病死ハ廉ハシツ の四相なり生住異滅ハ細ハサク ハ

種へ生ハシム事も無住ハ人弓居候トモ先  
者とあり異ハ病と文て云矣形<sup>1</sup>がく減ハ凡  
まく眞俗よつと法性真如<sup>2</sup>理と真諦  
といひ是の本體の事<sup>3</sup>と云々と俗諦<sup>4</sup>ことなり。真名

出世簡俗ハせり。ふとが大更と  
あひてん人ハまうびてをひよしとひい  
ときすと首が月一

どくよハアシモルハモ病とまくはすのよも  
ヨリキトモスムモ西山も次第わざや  
タクモドモえりあり又ハシラモハ  
タクモドモえりあり又ハシラモハ

まつめの腰ハラをもじてよその妻アシメと離ハセれて  
今イマのままでおねがいオネガイしむ

まかして、かぢりしよと泉ひゆうて嘆きよ

早々の氣と確もどといひ。小春十月興  
也。天地和暖，似春故名春。木の葉の落  
ちも警之。

まわるひからく次第に  
そよごうり四季の度量にてひのゆ  
るも(さか)四季が定まつててもひの  
字とぞくべ四季をすむ故に序とへ

也第原と申むと死がたりある  
主老痴丸ト決意ト改ムにてからり因  
やうふきくもれ御より之を終るよ  
アキタリあゝと申す  
中古の遺文

又壁冲ノ半壁トリ次ハ満てこそ破る  
滿モテルトモリハ御の壁トリ早く備不  
永久ノ事トヨモキナムジ

此段之久，豈是人之常情。予嘗與人論事，每以爲事之成敗，不以爲人之賢否，則事半功倍矣。

アラモトシルカタキナガ  
ゲン

うへてそりともやくら。生住毛  
威<sup>メシツ</sup>のとまうかえ八年。父毛良<sup>トモヒコ</sup>  
行<sup>ムスヒ</sup>のれもりなあ。ごとく。ふざ

也。人主、其國亡。則其臣子亡。故曰：「國亡而臣存者，未之有也。」

ひくらぬよがり。かくねくよ  
あらじゆみとまのえとゆく。  
もじよべくいはる。ま

十月之小蒙<sup>ハル</sup>ノ天氣早シモクシテ

もひきりまつと  
わらひのまのち

病氣の爲めに、おまかせをうながす。更にほ  
てもよしや。○  
〔馬の體〕病氣の爲めに、おまかせをうながす。

はにゆきりとくにのそとま  
しと六助を

卷之三

人情也。莫不以爲子孫之  
流也。此皆是其子孫之

又臣入天慶食此後大臣入天慶食大膳  
家主もおこなふことありまじめどり  
レシテ行ひ常ノトモドリ  
新任大臣天子侍御奉向す事無  
鶴と云ひて是事多し  
**宇治左大臣** 宇治惠正府頼長之保  
えノ亂ノハシムシナヒ足院開白忠實  
公工男法性も用白忠通公ノ身  
**東二條** 治芥四條院誕生所或重  
以歎主之友ノ二條南町西北町忠  
仁公家貞信公大入道アヒン傳領長  
久四年四月晦日薨夫。應和二年五月  
七日會於東二條殿被稱大食。知足院開白任  
宇治太府もひよてとこあつとけり。而  
カムルトニ。大長公。あせどりり。而  
カキハサウドトガミ。而ヒ二門か  
サレハ心脇ハツラもとを。ゆく。いあこ  
ども女院ハヒキトナリて大食を行ひ  
亭記。月。所觀而思後之觀于文思蘭觀

刀鋸則  
ばくじん 大鏡、師耕公の傳。もくと  
うそりり重ひがゆたりと六聲。卓  
絃詩註。撫鏡より蜀人贈鏡也。古之博  
美り事と、よく見てより  
一是よりを。錦く益と。  
べくしてわく。曾子鬼。身をばらさざる  
人也。卒す。  
「論語註。平生、輕遠之貞。  
よ今しきとしわざり。身よりく。あはれ文も  
あく不の意たり。又よちらくとも佛よりく。つ  
散乱心ふか。ふげん心急之法華  
方便品云。若人散乱心入於塔廟中。一  
餘南無佛。皆已成佛道。繩床  
聖禪。支入廟へ繩。とりて作よき物く  
菩薩十八物のうち。經玄。智度論云  
禪秦言。慧惟修。僧史畧。日禪者即  
定慧之通称。明心達理之趣也  
本理りと。うりて行め。ひよこよ  
と六門記。かくじで孰丈と。かわて不  
と

理と名別れて一偏著じと  
ハ嘆嘆事理不二  
ト立不ハ合水ノ論ト相りてし  
ト暫時もてしらずで真言史ト  
ト外相有トこれ門院必契  
此段ハハセノトクミナシモトニ原物  
トヒトトヨクノトキ  
**處當** 宇葉、穀魚廢切冰堅也當丁浪切  
底也韓子ニ玉色無當  
**魚道** 下學集、魚道  
道建盆益也以餘瀝洗盆痕喻之魚過甲  
道故云魚道也魚雖游泳木海終不忘  
但道者是又出所殊詳也

底也韓子云色無當魚道下學集云魚  
通建戎益也以餘瀝洗盆痕喻之魚過甲  
道故云魚道也魚雖游泳木海終不忘  
但道者是又出所迷詳也

頸くび鏡かがみ上うえ交かわれはなれ傳つたへ下したの  
ややうよ頸くび入いりるくまくまうり閣くらの手て  
手て平家物語ひやものものがたり頸くびら論べんわり  
よよ々辭こと手て勘解由かげゆ小路こうじ二品禅門にんぜんもん三  
住參議行忠じゆさんぎぎやうちゆ坐すわる寺てら五三住ごさんじゆと行草ゆきぐさ  
久男ひが手て平張ひらばトト也よとふどん  
板いたととて假ようしゆようこ護まつ  
護摩ぼまハ杯はん一語いっご之の焚火燒ほんかと齧くと舐なとと也よ  
梵語ぼんごハ重複ちうふく多おノ開加ひらか水みずハ梵語ぼんごハ  
爾そ加かハ水みずといい摩ま訶かハ大おハ梵語ぼんごハ  
摩ま訶か大迦だいか葉はカカどり清雨きよあめ僧云そうごん  
通とお我わ清冰きよひりくら谷くらやニゆるを於お莽ぼう辭こと  
公行こうぎやう建た

黒成摩醯首羅梵天帝釋の各集  
七日向世間善人惡人ノ名と記し  
通昭寺廣澤ノハシタニヨリ合恭廣澤  
僧ニ造地僧ハ寛朝秋書云吏部尚  
書毅實三才二字寛平上皇孫從寛室  
阿倍利稟垂首又云居通昭寺啓密隣  
世称廣澤寂流承仕法師す中の難復  
鷺く中とくおき

とが持つてこどももく  
へ家中よ法師まつり  
うそて。不<sup>レ</sup>うち使廳へ  
検非使  
基後タヒヤイ久我の門基具の勇タヒヤウ  
檢非使タヒヤウ使タヒヤウ別當タヒヤウ  
檢非使タヒヤウ使タヒヤウ別當タヒヤウ前タヒヤウ基後々と大理はふ  
てと云ふ委禁獄タヒヤウ今云ル者タヒヤウ破戒の僧  
と禁獄タヒヤウ法タヒヤウ若トクニタヒヤウ有タヒヤウモケ  
門入罪と大ケ難タヒヤウ友タヒヤウどしき近代の弊

百六十一  
遍昭まへ承仕法師  
廣澤大師  
日来、ひつまて。堂入りもえと  
ままで。ついにとつきいわむと  
うじ入りきりほどの室も入  
て。そここりくらうけちう一々  
すくと草あわすて人よろと  
りて入る。大師  
打手を新らうまれそは法師と  
しゆくしゆく。ちゆくと不力もと頼よ、呪を  
まきて禁獄せよとす。其後大納  
言別當の行よけん行けり  
○此段破戒の僧の禁獄をもと物語と見てほせ  
サ法

大衝の氣字。占い。アレルギーを本  
陰陽の。わ論へ。りわゆと  
アリト。そりく。入道門。イ。古モ  
有。シテ。ヒラゴ。ハウラ。ヨウモツ。ル。記。  
行。清。用。白。多。モ。アリ。ヒ。ム。ハ  
○此段、を人ニキニト記モ極ム。  
文ニ誤ミト付ク。トはス  
世の人。アヒテ。内。アヅ。クモ。遙。ロ。ム  
浮。流。人の。アヒテ。相。他。アヒテ。モ。失。ホ。ア  
アヒテ。心。アヒテ。注。意。アヒテ。ア  
アヒテ。心。アヒテ。物。モ。アヒテ。氣。アヒテ。及。ム  
人。文。ヒ。シ。アヒテ。人。アヒテ。書。モ。シ。

おとそひにひるを」といふは  
秘密の僧の傳と云ふが俗に  
顯密の僧といふ事あるが、佛說と  
もくじ

わくはよきとく天台宗かどく密ハ真言秘密の法  
秋宿 我凡俗の一牛ニ属ひよ  
財春禹をぞべ。此段我亦一通ざれ凡俗とゆじまき更といふ  
百六十六二三  
人間の心と云ふ事の日よりちり

**雪佛** 負和集子元雪佛頌一輩  
出一來方出圃トトロ咲臉トトロ風識得體

**體**元是水摩耶宮裏不移胎  
**安置**一宇也。又云「佛」即此字也

皇土  
支那  
雪佛入トヨリ  
キムジタマ

一通手の手はさう人あ  
何うか藝とばく人

わくわくうりら  
めまきのくわん

卷之三

卷之三

是爲我智と自慢する者か

アリス  
アリス  
アリス

角わくモク 羊モラクキウ 牛ノモリシ 牙わル虎  
狼猪犬ハモクモト類 ひくモミ 犬モタニモ

麥田の詞前半より人方物ノ事にて  
禽獸トシニシテア斐ニシテ

従ふ我まかに思ひ入り  
ハニセモハシタ

よほど思ひ入りて思へふ

も。に。よ。り。こ。そ。く。と。の。  
モニヨリコソクトノ

五十七尺矣。若如也，未定歸數。始於一而

姓富者、有德又能輕薄於迎吊慢也

鳴呼ト半々世俗よ

う。いふとちあねよ。まこと。  
四  
三

ひきれ  
ひきれ

物よりは事か  
もよほしとし  
我の藝への意

てそぞりめおれど思ひを失ふは心の事く矣  
愁がうとつゝもく我旨いもじゆくぬ事とよくもん  
らうとく幽れ云々不可滿樂不可極○い段情ひとまくわざり

卷之三

の事もあつた。まことに、  
おおきな事件が起つた。  
その事件は、おおきな  
事件だ。

おとぎのうた  
おとぎのうた

五  
こちわまと。おまかせれ。まくらの家  
えは一生じやうじゆそくらむとて、  
此處に元の意を失ひ、其の後は只の筆走りである。

てはとひく  
まよふなと  
モトヒル

く。あ。今。わ。ま。れ。よ。く。と。う。て。わ。ら。ふ。

やとすよふつてわ

うわさぬべ  
いとくに

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九

卷之三

卷之三

卷之三

かくのいひきとくと。

「譲りてから説ねへくらう」といふ  
もとからといひ方より多く人びとに傳ひた

百六十九  
一  
此  
也  
是  
事  
也  
之  
是  
事  
也  
之

後醍醐天皇八十一代ノ帝ミコト、達礼門院タツリモンイニ、中倉  
ノ后安徳天皇ミコトの母平清盛ヒラシマツノ女メイ・永子ヨウコ。

ふどりゆけりと人の。連れ  
門庭の石奈をまねはる羽院へ行ひ

通じて人を達化の役に立たせ  
てゆき、ひまく平家没落しては、又後多  
くの事ある。右京古今小治集主零  
ひしのびる

皇集  
スモウシムクニカレタリヨ。世ノ多幸一  
もうりゆく。年ハモツヒキモトモアリ。

まくすとひよしよまくすとひよしよ  
下呂け詞と證拠引

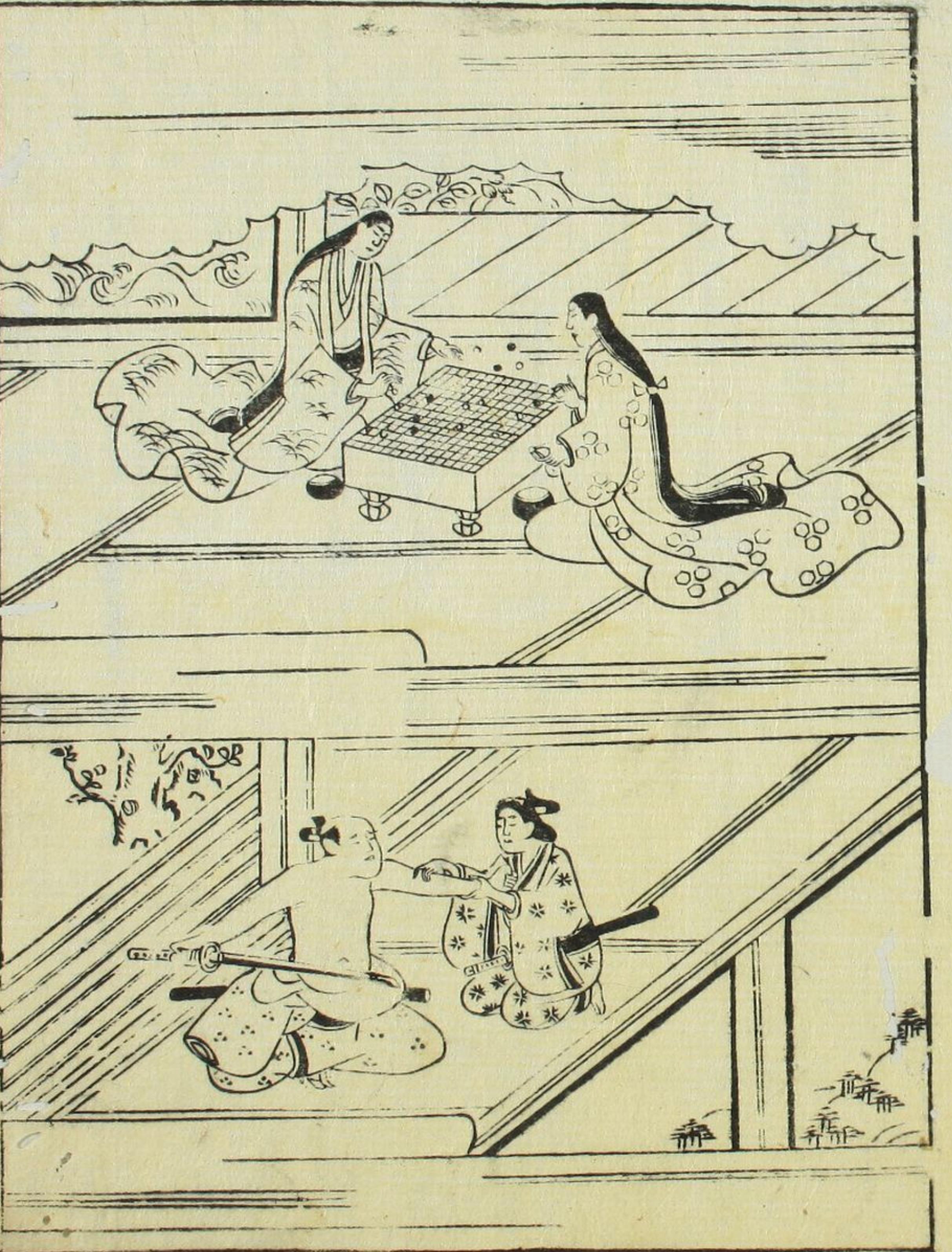
詩人  
之言  
也。此  
事也。

はまく事ふくじん  
是より用ひて永居を夏客も主もちよ益

卷之四

وَمُؤْمِنٍ بِرَبِّهِ وَلَا يَكُونُ  
فِي أَذْلَالٍ





之程にて。かくと。かじて。そ  
れに。なまき。ハリ合ひ。り。外史  
が。まほ。内向。門と。まほ。あら  
ひ。わ。れ。まか。の。な。遠。の。首。  
論語。遠人不服。則修文德。來之既來。則  
安之。註。内治修。然後。遠人服。有不服。則修  
德。以。來之。亦不當。勤。兵於遠。  
ことと水。俄。よハ。乱。と。済。と。或。害。と。水。を  
も。と。水。よ。し。三。モ。水。を。几。よ。わ。り。濕。す。  
本草。序。云。真諾。日常。不。能。慎。事。工。者。自。致。  
百病。之。本。而。恐。咎。於。神。靈。手。嘗。八。目。濕。  
及。責。他。人。於。朱。覆。皆。痴。人。也。平。生。我。力。告。  
生。と。縛。り。て。几。も。ア。深。地。す。と。て。密。病。ひ  
然。と。神。立。行。て。半。坡。人。と。う。ひ。毛。毛。毛。毛。  
化。と。進。と。進。と。進。と。進。と。進。と。進。と。進。  
禹。の。ゆ。も。そ。三。苗。と。征。と。一。夏。の。禹。王。と。三。王。の。一。書。大。禹。謨。帝。レ。名。禹。惟。時。有。苗。弗。率。汝。祖。征。禹。乃。會。群。后。三。  
旬。苗。民。逆。命。益。曰。惟。德。動。天。血。遠。弗。届。禹。班。師。振。旗。帝。乃。説。敷。文。德。畢。于。羽。千。兩。階。七。旬。有。苗。格。  
禹。又。行。て。三。苗。と。侮。立。も。國。ノ。わ。宮。の。より。こと。れ。と。れ。と。玉。令。下。も。ご。ば。ば。ご。く。  
民。多。り。服。う。と。毛。象。ノ。代。と。此。毀。万。ノ。革。か。と。水。い。と。ど。が。り。あ。と。未。可。く。う。と。毛。

「**アラシ**」  
諺語云々アラシ時氣未定

百七十二

血氣じらよわまく

戒之在色 情欲說文 情人之嗜氣  
有欲者也 人之心乎 育懃之喜樂愛  
德欲ホノ事わふと情欲と云く又性  
欲ニニ

心物よりあそび  
物欲より離れて  
生氣より身からいはれうるを

悲恐駭馬の七情、眼耳鼻舌身意の六欲、外ノ一珠とくらべし。前漢書、如登上、走先、秦而下とて、戰國の諸公子の山林と集め、て、珠履とくらべ、增と替ふ。唐のかに年九銀。

「まよひり。天籟」といふ言葉  
〔彼天籟とゆそきは、眞の聲也。」  
〔隱道のむかし〕

鞍自馬千金城眉と買へれ  
富貴成樂也

ま死ふばまを休  
フキヒ

余失ふた  
支那の世説モ死といひて居  
まち、身死とも死びて思ひてあと全くせん  
せんば思ひて  
おがと年がてり  
はよと名と流せ

アラタニイハシマツリテモ思ひ候。ト  
モシテモ思ひ候。ト

身とややもいとハア  
淡くうとうと精神氣血渙焉うむ物感動もう  
一わくわくうとうて

もうちえの有りて人まへ理と  
一  
はんそくどなりをあらへ  
モ神セイシ  
カクキスル欲モトニテナリ  
人ノ神ミ  
唐トアシケハナリ。心ハ行マヌラ  
セイシ  
カクキスル欲モトニテナリ  
人ノ神ミ

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper, possibly from an old book. The paper has a textured appearance with some minor discoloration and small dark spots, characteristic of old paper. There is no text or other markings on the strip.

「金魚の口」とか「び  
「金魚」とか「宝と貴」がよく

力とそよてまとて 惣をく人のワジ  
ウニ  
キハカとちやもろくと

小町  
古今集月錄  
古之  
今之  
月  
錄  
并  
吟  
芥  
子  
出  
羽  
郡  
司  
仁

此段著三人益えよかとて、遂に其わい革にて考へ  
心静かとハヤマリテ、トウヒテ、分か

時辰和之此作著部類云或云出羽郡  
子云玉造云小町非此事云五旨津印  
人有抄云或說出羽郡司小野良實貞女  
高澄女云三光院也說當澄女ト云云  
子云玉造云小町非此事云五旨津印

追小町子壯襄書云予行路之次步道  
間街邊途傍有一女人容貌憔悴身  
瘞瘦云予向女曰汝何鄉人誰家之

在父兄告此上引之文登于玉旨是借  
子良室之女爲壯時憇憇最甚襄日  
歎猶深トニ清行審倍清行ク三善ヨン

小町  
うらわのまち  
やまとばく

善相公十五是淨藏貴也人又見平  
也承和ノイドウ弘法入定、仁明天皇ノニテ  
撰集シテ、倍清行業ニ遍昭シトム。

正義の久  
大師弘法大師附傳元亨公書  
承和二年三月廿日小町がさくりやますをなひ半也。白今直  
ハシタキウク遍野葉平ふど皆眞丈徳ノ付ス。古今一

人をもとへ三河のぞにたりてすとやひやりくからてくふる小町  
ひむきがまとうとよのねとてこくわくわいあんとす康萬ハ陽成院のゆみの人もすれ  
命定りほく作の月報

朝德年中

三

月

日

記

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

シ

ト

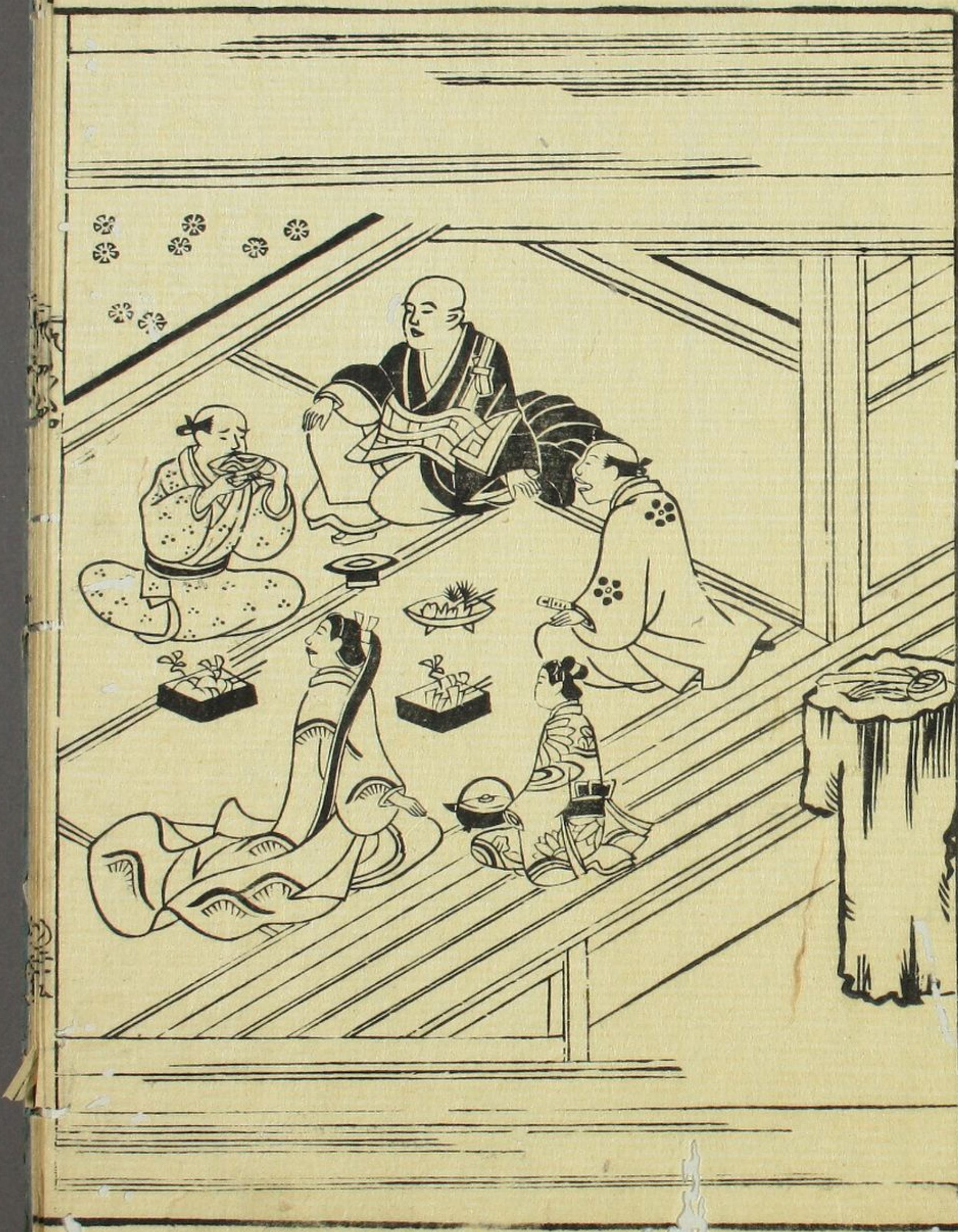
シ

ト

シ







○此段人酒とあつて云ふ事も亦と  
といふうちも云ふ事も亦と  
うくち上物をとづく終り  
うこわもあべてこすて幼臣より  
いひと講じりか心トトムハウキシル  
酒とて摶とさんそ人の疾病とあるとま向  
ところ同公且ハ酒詔と作アテ國氏といひうて品  
玉も臣も洗滌して水とし  
玉と破ふ古今アラシモ御よけりかと  
おども酒杯林伏そ乳ノ始ヒソヘ  
テスとウハ酒論もくとくわきま竹解も三盃の微醺と  
ハトウヒト支へ障里の好と似とくと入がと  
相違のとくと此草士一部のウボ皆かくの  
黒戸

清涼友ノハ庵口ノアリ  
小門 十六代光孝天皇トアヒトニ  
明大

皇太子元慶、年月日即位仁和三年崩  
御す」は小門の隣ト葬奉足故小  
おの寺とて  
首も人モ常陸太  
さ中勢の上り人もまた宰帥をと  
へとまへ、卒立事とらひも、寺山  
伍ヲもいざも秋モとてぶつじ  
もととハ黒戸の事歴と  
此段黒戸の末歴と

此段へは其の事のとあくてあらう。さりとばをうして、天代鞠場より下へと下りて、坐す。西  
之をば在る事あり。坐すがゆきまと  
**威**  
**威**一のまことしも。門付五の神、五の兵、五の馬よしも。そて寶劍  
と、人ぞりも。かくふじゆとびて。しらがふ女房の申よ。御衣の  
宝劍と、其人を。神手と、かりて御衣  
侍所へ行草り。ひきぬきとまく。宝劍  
を登り。庄の山劍と。とて。とて。とて。  
て宝劍と。語あり。宝劍三  
種、神器の内にいへば、清涼扇よ  
**別**  
**別**裏にて、内侍所と指す。一  
**訓** ゆきやよい。いりし。  
**典侍** あに官より。がんとくの典侍。一。禁松が玉劍重慶。時内  
侍え直。東之只時。其侍傳之。特遣。送内侍。一。典侍。掌侍。かく。劍とよ。物ふみ。ばつわく。  
**入宋** 文部へ。後子よ。扇のそまく。八角形ひ  
**通解** 傳記本詳。越前永平寺への道元トハ  
別々。奥の那蘭陀寺まで。談多。まよ  
切薩大五經。五千餘卷。七千餘卷と。あ  
ぎうり。首楞嚴經。十卷。ち  
**菊**  
**菊**院。寺と。聖の門。まし  
**中和度那蘭陀大通場經。経。中和度那蘭陀大通場經。経。**

那蘭陀寺へ入るに至りと申す。ナリトシノ  
ハ既も云ひて、ナムモア滅傳法歌  
は既ても人間どもよ而見り。レ仲  
にうかがえり。ナラハナニラニ  
ナドサヌジ。ナラニラニラニラニ  
ナラニラニラニラニラニラニラニ

左義長如比文字

卷竹事文類

と。真言院より神泉苑へ出一て、燒火ぐ

聚爆竹神異經西方深山中青火長尺餘

則病寒熱石曰山藥人燒著火中煙

有病而山藥驚憚。歲時記爆竹燃

草起於庭燎。左義長又西域長十日儀漢朝佛經所云道去不日五丈而生

と狗とハア体ハ佛はノ身三丈八尺也トモ佛家流人法家又巨口

持未と調伏の威儀ナリモ三災杖燒骨舍ハ一毒退治也トリナム

正月の夜うちりと顕昭神中抄曰十節銀

貢帝取金頭髮今故是に以波例漢土奉用件支

國中無仍日本國字具別一年始打毬故然則毬松玉魁春之

御作法金誦等神泉苑

法成院の地江談云神泉苑修請雨經法四度大僧都空海七日不雨降

神泉苑上天印降雨天下潤澤下界佛家ハ是も佛法成就の心にて義長のまわりに以

眞好ハ神泉苑の地ノ名ナリトナリ。此成院三毬松入事をあらわす

眞好ハ神泉苑の地ノ名ナリトナリ。此成院三毬松入事をあらわす

ふよ似ひしがれちとくへすまとこゆうとくへよとわや

こそそんじんじへこむとくへすまとこゆうとくへよとわや

すまとくへよとわや



詞院  
收訂院  
皇子人皇十  
卷

わふ物うつゝこ者よ  
いひゆ

ノ帝ノ  
瀆ぬもけ  
勅撰の作者  
源河院瀆故典侍とわく月記三卷  
うち源河院の宮女あゆゆふる羽  
院かとあくがうまへりのすとよ  
幸い或説源三位を敵くじよと

主。院。ふく。まほ。  
主。院。ふく。まほ。  
主。院。ふく。まほ。

云々非之二種院よりはノ一仲の右の備故  
トナリシウヤヨミコモカク。此段三

以ノトヒケ日記ニテ  
傳承ノ事と云ふ次手ナ初雅人雜歌モ故ウマシノ記モ

四條大約玄陰觀之

怪異と傳ひよまいとぞ

當善勝す。大臣言隆衡ロウヒンハ勇。母ハ大臣信  
鮭サケと云魚。鮭サケと生リアムキサキトモ

乾卦と坤とて、うやまくかみへど  
極のまゝ何事もあらず 鮑とて、うらうら

まゆみ半もわよもてわよ。種ひらひ

今更らむらに  
アリタムハ  
アシテモホトト  
アシテモホトト

人乞く牛ど、角とくり。人

人馬と耳とみてそへ

卷之三

18  
0

相模守寸秋の母も。才不善尼とぞ。

時制  
所率の執權に並び相換守寧

秋田城ノ從立位上景盛入道覧也

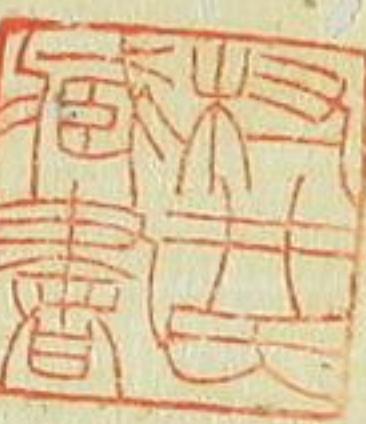
大さが、ハヤシのうちの子とひわぢ、トモ  
トモハ井蛙か、セドヒの事分家

けり。經をいふ心也。故命 源詔類聚  
うやまひうゞむ心也。おきて 五系、汎其

章サハ細ニシカク(ナリテ)打ガ一男  
サイン

尼、細より多くて、





卷之四

○此段もお段の

○第三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一百一

一百二

一百三

一百四

一百五

一百六

一百七

一百八

一百九

一百十

一百十一

一百十二

一百十三

一百十四

一百十五

一百十六

一百十七

一百十八

一百十九

一百二十

一百二十一

一百二十二

一百二十三

一百二十四

一百二十五

一百二十六

一百二十七

一百二十八

一百二十九

一百三十

一百三十一

一百三十二

一百三十三

一百三十四

一百三十五

一百三十六

一百三十七

一百三十八

一百三十九

一百四十

一百四十一

一百四十二

一百四十三

一百四十四

一百四十五

一百四十六

一百四十七

一百四十八

一百四十九

一百五十

一百五十一

一百五十二

一百五十三

一百五十四

一百五十五

一百五十六

一百五十七

一百五十八

一百五十九

一百六十

一百六十一

一百六十二

一百六十三

一百六十四

一百六十五

一百六十六

一百六十七

一百六十八

一百六十九

一百七十

一百七十一

一百七十二

一百七十三

一百七十四

一百七十五

一百七十六

一百七十七

一百七十八

一百七十九

一百八十

一百八十一

一百八十二

一百八十三

一百八十四

一百八十五

一百八十六

一百八十七

一百八十八

一百八十九

一百九十

一百九十一

一百九十二

一百九十三

一百九十四

一百九十五

一百九十六

一百九十七

一百九十八

一百九十九

一百二十

一百二十一

一百二十二

一百二十三

一百二十四

一百二十五

一百二十六

一百二十七

一百二十八

